

豊里大橋

大阪市にある斜張橋6橋のうち2橋が旭区にある

豊里大橋は、万国博覧会の関連事業として昭和45年(1970)3月完成した。

大阪市東部を縦走する都市計画道路新庄大和川線(大阪内環状線)が淀川を渡る、上流の鳥飼大橋と下流の長柄橋の中間地点。水面から45メートルの高さにA字型の塔を両岸に建て、この塔から斜めにザイルを張り橋を吊り下げた通称「やじろべえ橋」。幅18メートル、道路部全長928.22メートル、橋長561メートルのうち、中央376メートルの斜張橋である。ケーブルは、新工法で直径5ミリメートルの素線を平行に束ねた六角形状、直径28センチメートルを上段2,464

本、直径22センチメートルを下段1,524本と当時世界初のケーブルの大きさで、全て実験済みであった。大阪市の東玄関口のモニュメントとして外観および景観形成についてシンプルさと明快さで今も夕陽に映える橋として多くのファンを呼ぶ。下流隣に位置する菅原城北大橋とは夫婦橋とも称される。

大阪市にある斜張橋6橋のうち2橋が旭区にある。昭和41年(1966)神戸の摩耶大橋、昭和43年(1968)瀬戸内海の尾道大橋などに続き、当時大きさ日本一の斜張橋として完成した。

斜張橋の特徴は…

- ①ケーブルによる応力調整が可能で、鋼重が軽減できる。
- ②均等に小さな等高桁も設計できる。
- ③吊橋に比べ剛性が大きく、耐風、耐震設計に適性。
- ④美観に優れている。
- ⑤軟弱地盤の多いわが国に施工上有利な形式である。



写真■豊里大橋橋上



写真■淀川堤防から豊里大橋を見る

フィールドワークでは、豊里大橋を見学。

コラム 平太の渡しの思い出

「平太の渡し」「淀川」「太子橋小学校」「江野川」の思い出

昭和31年(1956)頃の平太(田)の渡しは無料で、自転車や通勤通学の人立ったまま乗っていた。子どもだけでは乗れず、夏休みに大人の側に隠れて乗る小中学生もいたが『船頭さん』は怒りながら川岸から離れると『あきらめて』いた。

私の10歳当時、近所の男の子達を連れて淀川へ魚釣りに行く余り笑わない、いつも強面の70歳前後のおじいさんがおられた。時折後ろからついて行く女子の私におじいちゃんは気にもせず、淀川の川岸から大分川中の石ころの積まれた釣り場(水制)で、木切りに釣り糸と、釣り針にミミズの釣り餌をつけてわたしてくれる。モロコ、小ブナ、もう忘れたけれど他の小魚もつれる!大き目のフナは、おじいちゃん達が自宅へ持ち帰り、大家族の食卓に並んでいた。

私は退屈するとタニシ取りもし、それを近所、小学校の女友達とおひな祭りに母がバラ寿司・蛤の清し汁とともに、わけぎの酢味噌和えにしてくれて食べることの出来たほどきれいな川を思い出す。

男の子はザリガニ取りも、又遊泳禁止なのに対岸に抜き手泳ぎで渡る中学生もいた。もちろん禁止となるほど真ん中は渦が巻き、亡くなる人や学生も多く『土ざ衛門』の言葉も知り、警察や当時消防組合が走り廻ることも。

消防団は台風となるといつも淀川の水嵩を見回り、年に一度は堤防が切れるかもと、小学校の鉄筋コンクリートの三階に避難指示をしてくださった。ランドセルに教科書を入れ何度か行った。家庭が断水になると、近隣の人はブリキのバケツを太子橋小学校に持参し、校庭の真ん中の大きなイチョウの木の下の水道にも助けられた。

江野川では、緑橋、太子橋、橋寺橋などの木橋で男の子が、特に夏休みにオニヤンマ・ギンヤンマ・シオカラトンボ・赤とんぼをトリモチをつけた長い枝や棒網で捕

り遊んでいた。川岸に菜の花や赤い花も白い花も咲いていたが、車の増えだした昭和40年(1965)頃には、ドブ川と呼ばれていたと思う。少し上流に紡績工場があり、毎日水の色が違って流れて来ていたし、車社会や汚水のため、ヘドロも川岸に突き出していた。私の知る内環状線の出来る前は、国道1号沿いに建築資材置き場があり、子ども達はその屋根から飛び降りたり、砂や小石を道端に持ち出しては職人さんに追いかけられ、走り廻っていた賑やかな場所!友人は、信号も無く子どもが行き来し、荷馬車は無論、当時サーカスの象さえ歩いてきた道端ととも、子ども達のオアシスであった、駄菓子のある『よろずや』さんの店とおばさんは消えた。そして豊里大橋は、美しい斜張橋が旭区と対岸を結んで淀川に架けられた!今、大阪市の大動脈として特に多くの車が走りかす屋間とともに、夕べには市外からも人々が夕陽の美しさに橋の中央アーチに憩い、カメラで菅原城北大橋をも写す。【昭和21年生】



写真■平成19年(2007)10月太子橋フィールドワークにて私たちのリーダーであり、広く教えていただき、旭区の郷土史の生き字引であった小井戸茂氏を偲びながら記しました。平成20年(2008)2月ご逝去

「平太の渡し」に乗船してー。

300年続いたと言われるこの渡し船の対岸は、豊かな農村で遙か向うの上新庄あたりまで、農家が点在し畑が広がっていた。田舎に親戚のない私の家では、つてを求めてわずかの衣類などを預かってもらっていた。

平太の渡しへ行くのに江野川にかかる(たしか木の橋だった?ように思う)太子橋を渡し船に乗った。食料調達の為の物々交換である(生きていくための智慧、原始にかえった!)

わずかに預けてある衣料の何枚かを引き出して食料にかえるのである。

ちなみに対価は、【若い娘の着物は米3升】、【年寄中年の着物は米1升】と覚えている。お百姓さんが羨ましくて羨ましくてならなかった。

父母が育ち盛りの子ども達(疎開先からやっと帰ってきた弟妹もいた)の糊口をみたすのにどれ程苦労したことか、今の飽食の時代、想像だに出来ないー。